

12 コマンド実行ツール

12.1 コマンド実行ツールとは

コマンド実行ツールは、CMクライアントがインストールされたりリモートマシン上で、指定したコマンドを実行するソフトウェアです。コマンド実行ツールで実行可能なプログラムには、通常のコンソールコマンド、サービスプログラム（Windows NT系のOSのみ）、コマンドインタプリタ内蔵のコマンド（dirコマンドなど）があります。

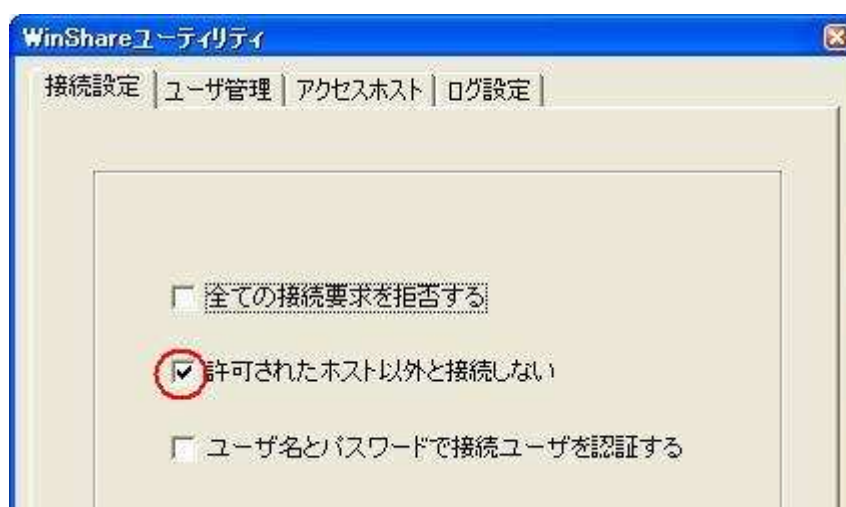
注意：本ツールは2003年1月リリース版より追加されています。それ以前にリリースされましたVer4.0には含まれておりません。それ以前にリリースされましたVer4.0を導入済みで、本ツールをご利用になりたい場合は、2003年1月以降のリリースの修正モジュール（RUR）をご適用ください。

12.2 コマンド実行ツールを使用する前に

コマンド実行ツールでコマンドを実行するには、クライアントにおいてWinShareユーティリティを使用し、ファイル転送の実行許可を設定しておく必要があります。

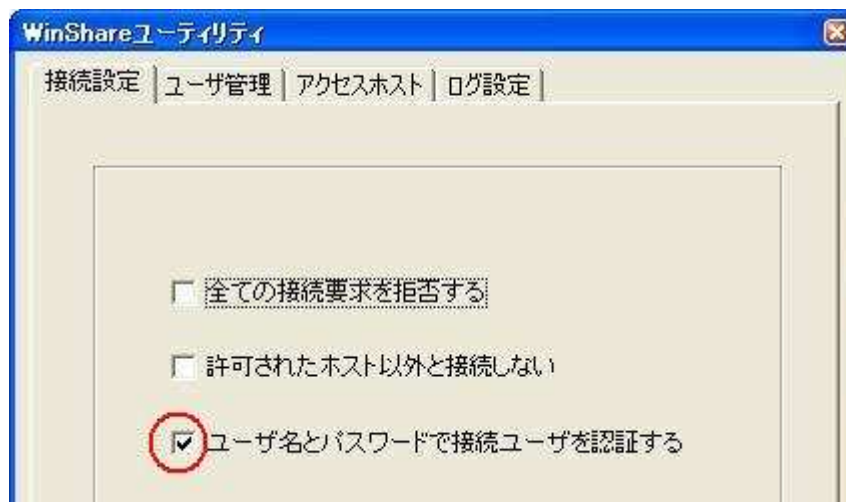
■ 許可されたホスト以外と接続しない設定にした場合

許可されたホスト以外と接続しない設定にした場合、コマンド実行ツールを使用するホストが制限されますので、「アクセスホスト」タブにて、コマンド実行ツールを使用するホスト名を登録しておいてください。



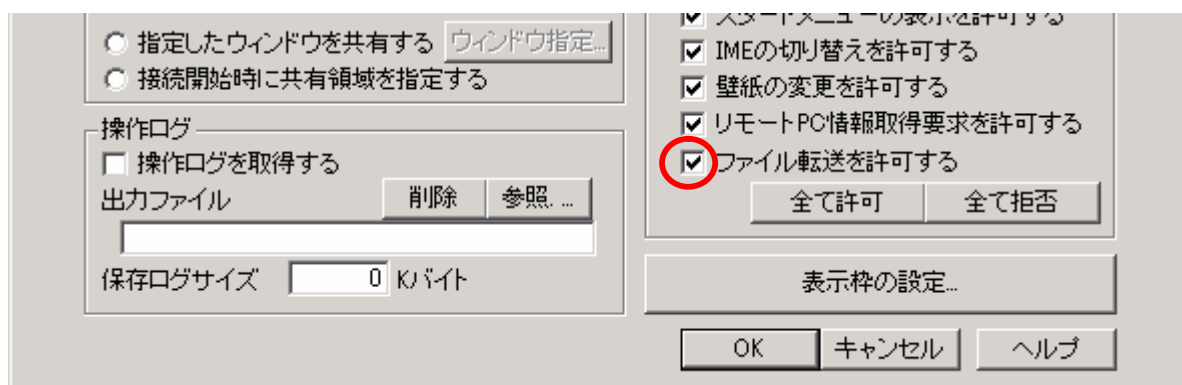
■ ユーザ名とパスワードで接続ユーザを認証する設定にした場合

ユーザ名とパスワードで接続ユーザを認証する設定にした場合、コマンド実行ツール使用時にユーザ認証が必要になります。



「ユーザ管理」タブにて、コマンド実行ツールで使用するユーザを登録してください。さらに、そのユーザにファイル転送を許可する操作権を付与する必要があります。

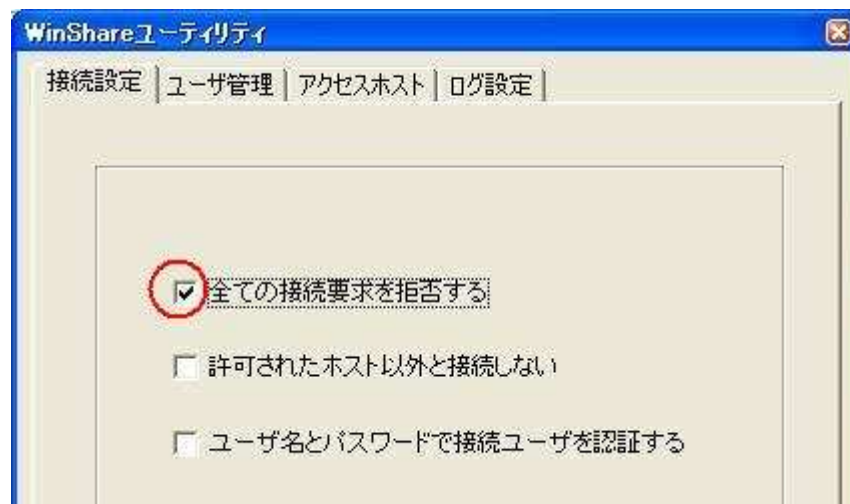
ユーザのプロパティを表示し、＜詳細設定＞ボタンを押してください。「ユーザ設定の詳細」ダイアログボックスが表示されますので、「操作権」の「ファイル転送を許可する」チェックボックスをチェックしてください。



ユーザ名とパスワードで接続ユーザを認証する設定にできなかった場合、コマンド実行ツール使用時にユーザ認証は必要ありませんが、WinShareユーティリティに登録されているビルトインアカウントに操作権が必要です。ビルトインアカウントのユーザ名は、「guest」です。したがって、ユーザ名とパスワードで接続ユーザを認証する設定にできなかった場合は、guestの操作権として、ファイル転送を許可しておく必要があります。

■ 全ての接続要求を拒否する設定にした場合

全ての接続要求を拒否する設定になっている場合は、コマンド実行ツールを使用してコマンドを実行することはできません。



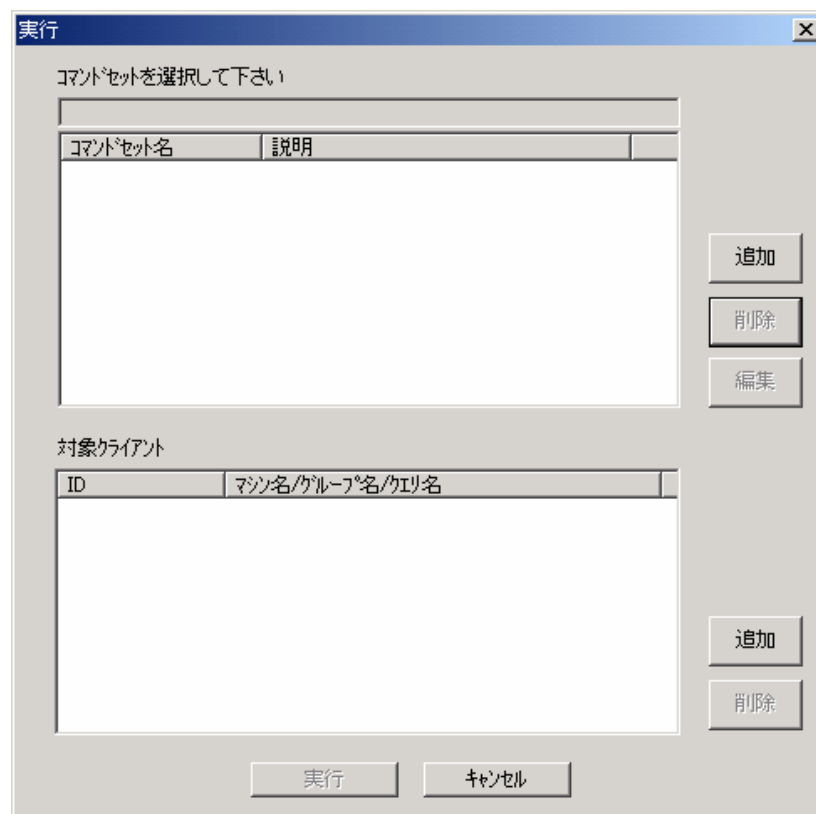
12.3 コマンド実行ツールの操作

12.3.1 コマンドを実行するには

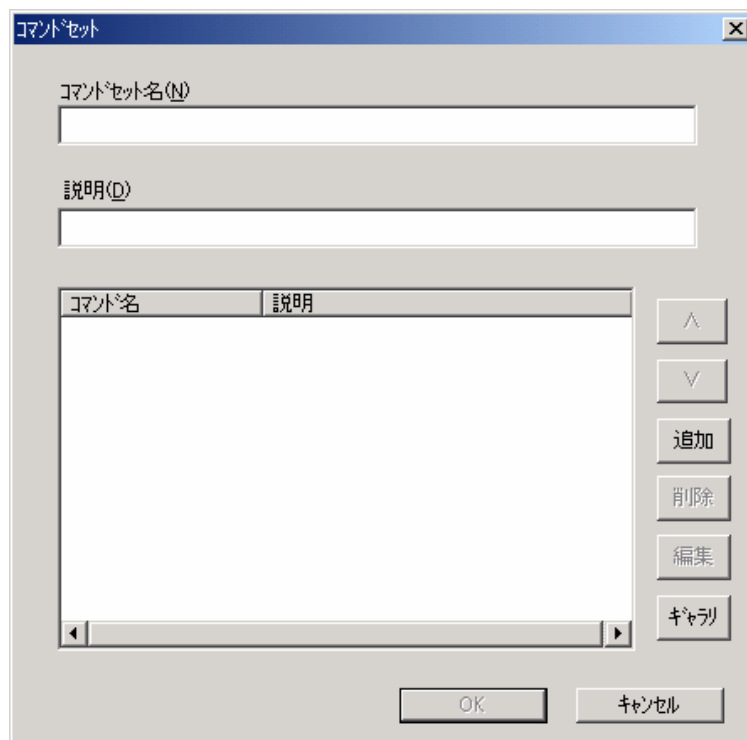
(1) コマンドセットの登録

まず、実行するコマンドセットを登録します。コマンドセットとは、複数のコマンドからなる、コマンド実行ツールにおける実行単位です。

コマンド実行ツールを起動して、「コマンド」メニューの「実行」コマンドを選択してください。「実行」ダイアログが表示されます。



コマンドセット一覧の右にある、＜追加＞ボタンを押してください。
「コマンドセット」ダイアログが表示されます。



「コマンドセット名」と「説明」とを入力してください。「コマンドセット名」は、省略することができません。

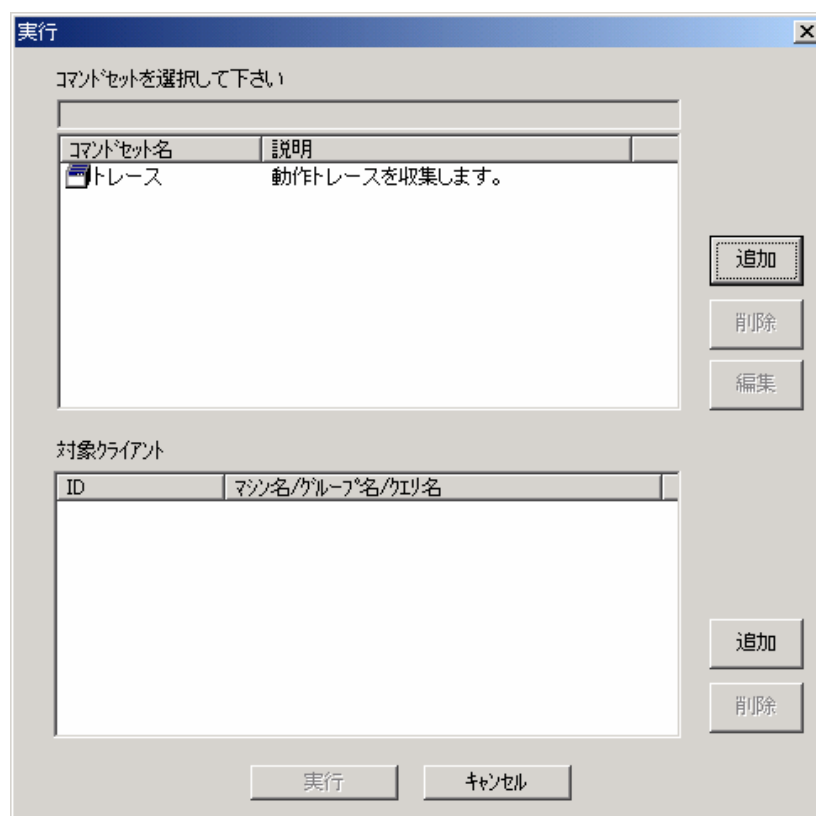
<追加> ボタンを押してください。

「コマンドウィザード」が開始されますので、画面の指示に従って、コマンドを登録してください。コマンドウィザードの操作説明は、「12.3.4 コマンドウィザードで、コマンドを登録するには」を参照してください。

の作業を繰り返して、このコマンドセットで実行したいコマンドを、全て追加します。

<OK> ボタンを押してください。

「実行」ダイアログボックスのコマンドセット一覧に、作成したコマンドセットが表示されています。

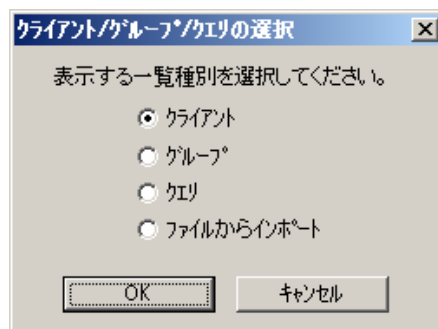


「コマンドセット一覧」から、作成したコマンドセットを選択します。
既に登録してあるコマンドセットを選択しても、かまいません。

(2) 対象クライアントの指定

「対象クライアント一覧」の右にある、<追加> ボタンを押してください。

「クライアント/グループ/クエリの選択」ダイアログボックスが表示されます。



「クライアント一覧」、「グループ一覧」、「クエリ一覧」、「ファイルからインポート」の中から、表示する一覧種別を選択し、＜OK＞ボタンを押してください。

「追加」ダイアログボックスが表示されます。ダイアログボックス中のリストには、 で選択した一覧種別により以下の情報が表示されます。

クライアント

マネージャに登録されている全クライアントを一覧表示します。実行対象のクライアントを選択し、＜選択＞ボタンを押してください。



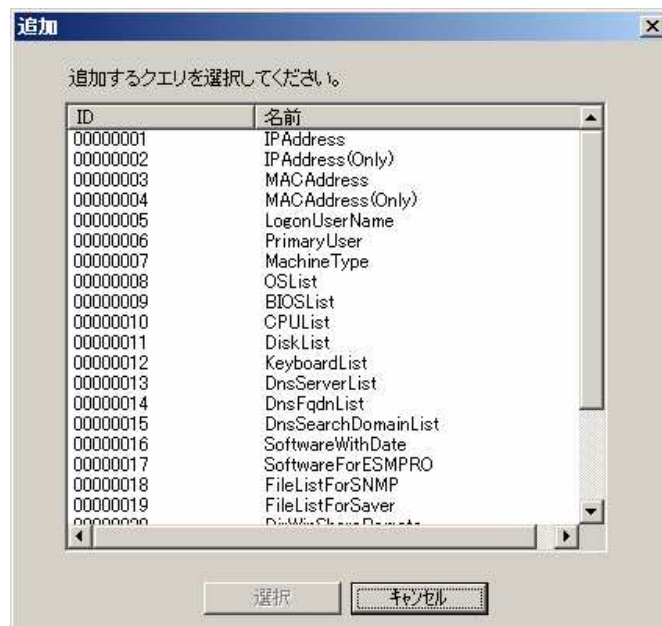
グループ

CM管理ツールで登録済みのクライアントグループを一覧表示します。選択したグループに所属する全てのクライアントで、コマンドを実行します。必要なクライアントグループを選択し、＜選択＞ボタンを押してください。



クエリ

CM管理ツールで登録済みのクエリを一覧表示します。選択したクエリを実行し、該当する全てのクライアントで、コマンドを実行します。必要なクエリを選択し、＜選択＞ボタンを押してください。



ファイルからインポート

テキストファイルからクライアントの一覧を取得するため、以下のダイアログボックスが表示されます。クライアント名を記述済みのテキストファイルのパスを指定してください。



ファイルのフォーマットは以下に示すとおりです。

テキストファイルのフォーマット

```
Computername1  
Computername2  
Computername3  
Computername4  
Computername5  
.  
.  
.
```

- ・ 1行につき1つのコンピュータ名を記述します。2つ以上の指定は構文エラーとします。
- ・ コンピュータ名は大文字小文字は区別しません。
- ・ 行頭にシャープ(/)文字が2つある場合コメント行とみなします。
- ・ ファイル中の同一コンピュータ名の重複指定は許すものとします。

ファイルに記載したクライアントはマネージャのDBに登録済みである必要があります。未登録のものがある場合には、以下のメッセージを表示されます。



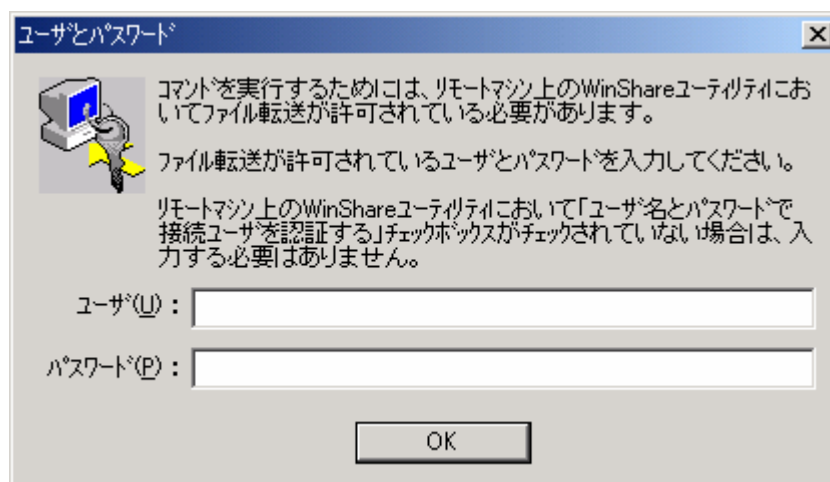
続いて、テキストファイルに記載されているクライアントが一覧表示されます。未登録のクライアントは一覧の上部に表示されます。



(3) コマンドセットの実行

<実行> ボタンを押してください。

「ユーザとパスワード」ダイアログボックスが表示されますので、WinShareユーティリティで登録してあるユーザ名とパスワードとを入力して<OK> ボタンを押してください。WinShareユーティリティでユーザ認証を行わない設定にしている場合は、入力の必要はありません。そのまま<OK> ボタンを押してください。



12.3.2 コマンドの実行結果を参照するには

(1) 進捗を見る

メインウィンドウの上ペインで、進捗状態を見たいコマンドセットを選択します。

下ペインに、クライアント毎に、コマンドの実行結果が表示されます。

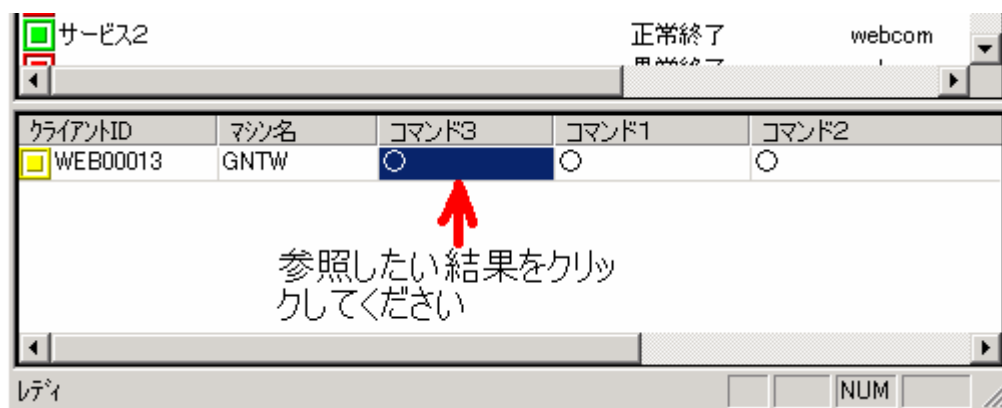
「実行中」と表示されているコマンドが、そのクライアントで、現在実行されているものです。
コマンドが正常に終了したものは、「○」と表示されます。

コマンドの実行がエラーになったものは、「×(0xAAAAAAAA/0xBBBBBBBB)」と表示されます。「0xAAAAAAAA」は、コマンドを実行するまでに、コマンド実行ツールで検出したエラーコードです。「0xBBBBBBBB」は、コマンドの終了コードです。

(2) コマンドの詳細結果を見る

メインウィンドウの上ペインで、進捗状態を見たいコマンドセットを選択します。

下ペインで、詳細結果を見たいコマンドの結果を、マウスの右ボタンでクリックします。クライアントIDや、マシン名の列ではなく、**コマンドの結果**をクリックしてください。

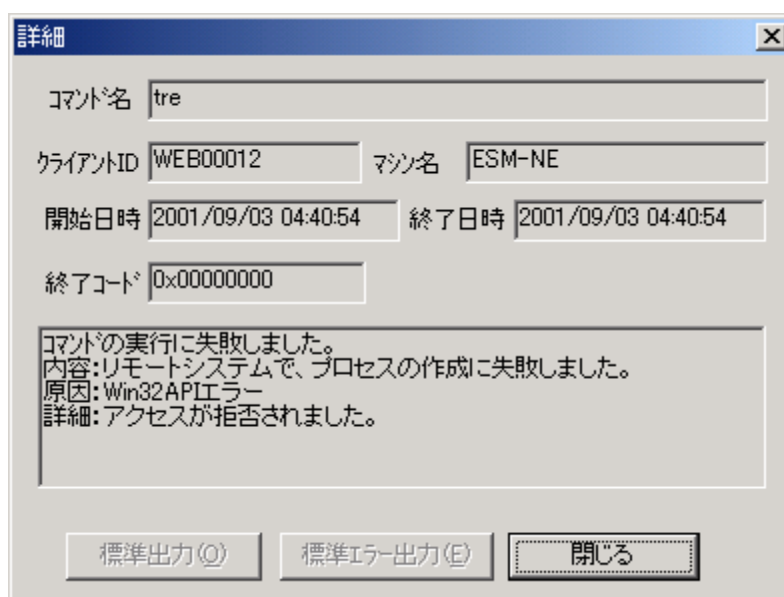


ポップアップメニューが表示されますので、「詳細結果」コマンドを選択してください。

「詳細」ダイアログボックスが表示されます。

「終了コード」は、実行したコマンドが返却した終了コードです。

その下の欄には、コマンドを実行するまでに、コマンド実行ツールが検出したエラーの詳細を表示します。



(3) コマンドの標準出力を見る

コマンドが標準出力に出力した文字列を、参照することができます。

下ペインで、詳細結果見たいコマンドを、マウスの右ボタンでクリックします。

ポップアップメニューが表示されますので、「標準出力」コマンドを選択してください。

メモ帳で、コマンドの出力を表示します。

12.3.3 実行中のコマンドを中止するには

(1) コマンドセットを中止する

中止したいコマンドセットを、メインウィンドウの一覧から選択してください。

「コマンド」メニューの「中止」 - 「コマンドセット」コマンドを選択してください。

一覧から、実行を中止したいコマンドセットを、マウスの右ボタンでクリックし、表示されるポップアップメニューから「中止」を選択することでも、中止できます。

注意：現在、実行しているコマンドを中止することはできません。たとえば、三つのコマンドからなるコマンドセットの、二つ目のコマンドが実行されているときに中止を指示すると、二つ目のコマンドが終了した後、三つ目のコマンドを実行せずにコマンドセットの完了となります。

(2) 一つのクライアントでの実行を中止する

中止したいクライアントを、メインウィンドウの下ペインから選択してください。

「コマンド」メニューの「中止」 - 「クライアント」コマンドを選択してください。

一覧から、実行を中止したいクライアントを、マウスの右ボタンでクリックし、表示されるポップアップメニューから「中止」を選択することでも、中止できます。

注意：現在、実行しているコマンドを中止することはできません。たとえば、三つのコマンドからなるコマンドセットの、二つ目のコマンドが実行されているときに中止を指示すると、二つ目のコマンドが終了した後、三つ目のコマンドを実行せずにコマンドセットの完了となります。

12.3.4 コマンドウィザードで、コマンドを登録するには

(1) コマンドの種類

コマンドには、以下の三つの種類があります。

A) ノーマルコマンド

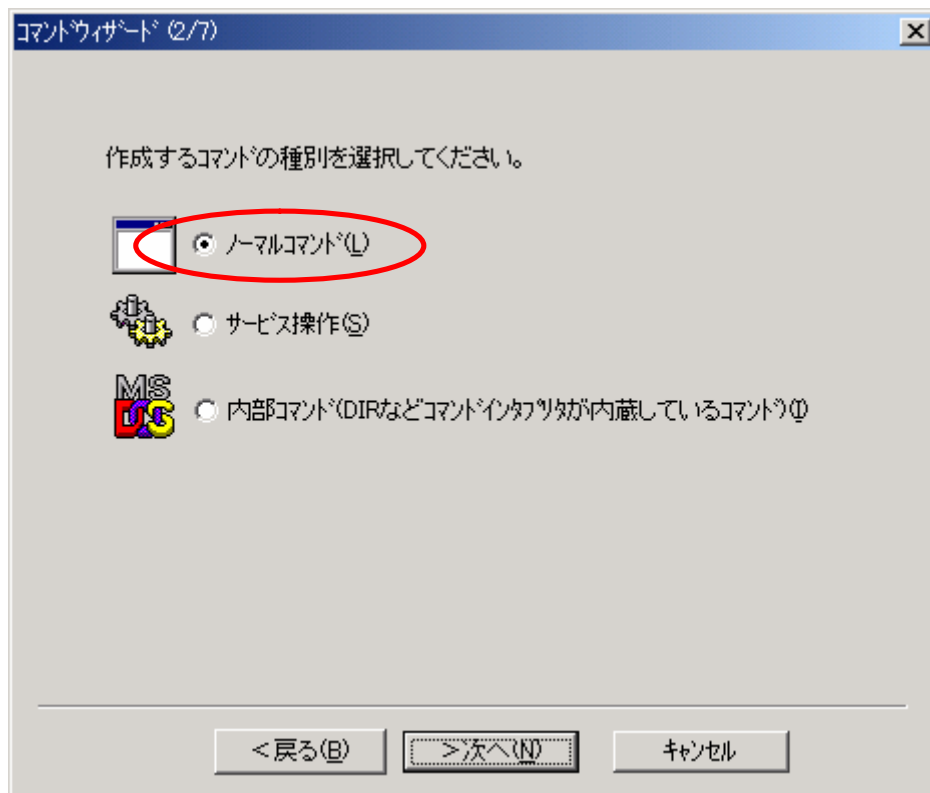
通常のコンソールコマンドです。

B) サービス操作

Windows NT系のOSで、サービスの起動 / 停止を行います。

C) 内部コマンド

DIRコマンドなどの、コマンドインタプリタが内蔵しているコマンドです。



(2) ノーマルコマンドを登録する

コマンドの種別を選択するダイアログボックスで、「ノーマルコマンド」を選択して、< 次へ > ボタンを押します。

実行するコマンドラインと、コマンドの作業ディレクトリとを指定します。

コマンド名に空白を含む場合には、コマンド名をダブルクォーテーションで囲んでください。

(例 : "C:\Program Files\ESMPRO\ESMPROCM\BIN\CMAR.EXE")

作業ディレクトリは省略可能です。ただし、省略した場合、コマンド実行時の作業ディレクトリは不定となります。作業ディレクトリが固定でなければならないコマンドは、必ず指定してください。

コマンドラインと作業ディレクトリとには、特殊文字を使用して、環境変数や、レジストリの値を含めることができます。特殊文字については、「12.3.5 コマンドラインに指定可能な特殊文字」を参照してください。

入力が終わりましたら、< 次へ > ボタンを押します。

次に、終了コードの判定方法を指定します。

まず、コマンドの終了コードを判定するかどうかを選択してください。「終了コードによる成否判定を行わない」を選択しますと、このコマンドが終了したとき、その結果を判定しません。このコマンドは、必ず正常終了扱いとなります。

「終了コードによる成否判定を行う」を選択した場合は、その下の、正常終了したとみなす終了コードを登録してください。コマンドが、ここで登録された値で終了しなかった場合に、そのコマンドは異常終了したとみなします。

入力が終わりましたら、<次へ> ボタンを押します。

コマンドの終了を待ち合わせる時間を「秒」単位で指定します。

実行したコマンドが、ここで指定した時間をすぎても終了しない場合には、そのコマンドを強制終了します。

入力が終わりましたら、<次へ> ボタンを押します。

オプションを指定します。

オプションには、以下のものがあります。

A) 標準出力を取得する

コンソールに結果を出力するコマンドの場合、このオプションを指定することで、その出

力を取得することができます。

B) 標準エラー出力を取得する

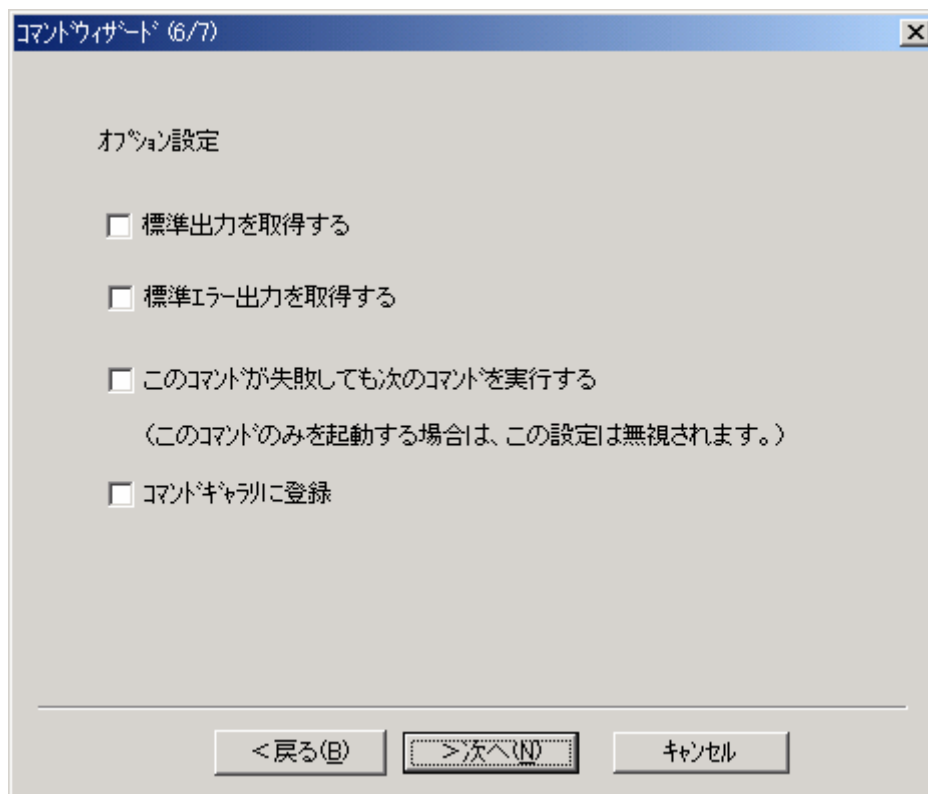
標準エラー出力（通常はコンソール）にエラー情報を出力するコマンドの場合、このオプションを指定することで、そのエラー情報を取得することができます。

C) このコマンドが失敗しても次のコマンドを実行する

複数のコマンドを一つのコマンドセットとして登録する場合、その中の一つがエラーになった場合でも、続けて次のコマンドを実行する場合に指定します。

D) コマンドギャラリーに登録

このオプションは、コマンドの実行には関係ありません。これを指定すると、コマンドギャラリーに登録され、別のコマンドセットを登録するとき、コマンドギャラリーから、ここで登録したコマンドを選択することが可能となります。

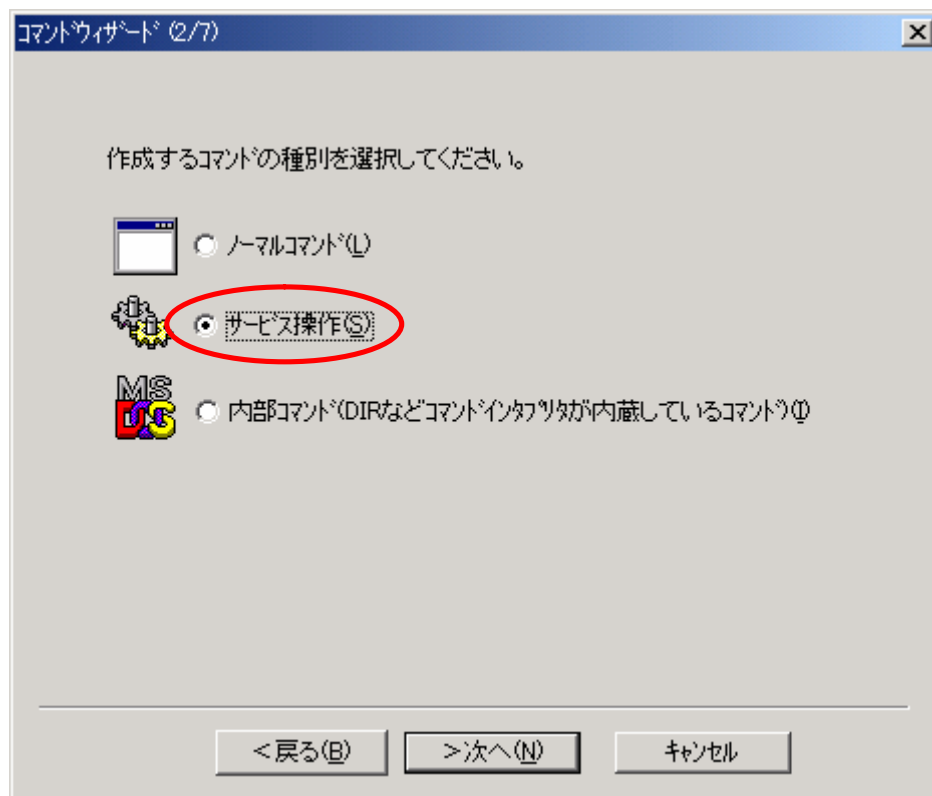


最後に、設定内容を確認して、＜登録＞ボタンを押します。

設定内容を変更したい場合は、＜戻る＞ボタンを押して、変更したい設定項目がある画面まで、戻ってください。

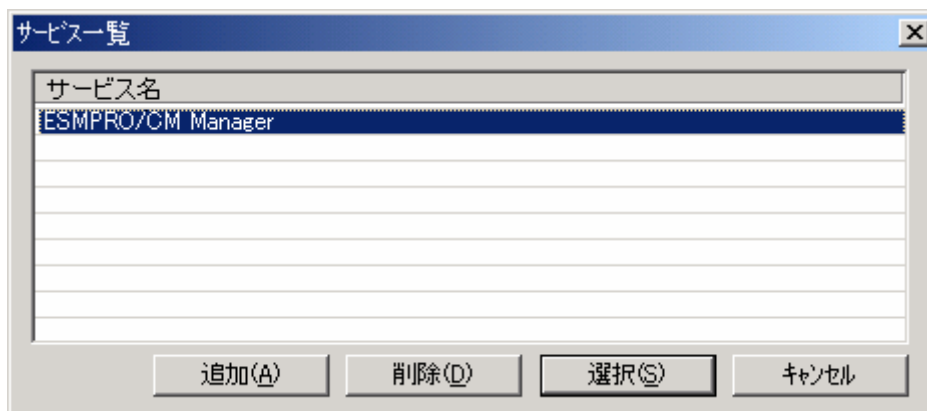
(3) サービス操作を登録する

コマンドの種別を選択するダイアログボックスで、「サービス操作」を選択して、<次へ> ボタンを押します。



操作を行いたいサービスの、表示名または内部名を入力します。

何度も同じサービスを入力する場合には、右側のボタンを押して、「サービス一覧」ダイアログボックスを表示してください。サービス名を登録することができます。



サービスの操作種別を選択します。

サービスの操作が完了するのを待ち合わせる時間を、「秒」単位で指定します。ここで指定した時間が過ぎても、サービスの操作が完了しない場合は、操作が異常終了したとみなします。

オプションを指定します。

オプションには、以下のものがあります。

A) このコマンドが失敗しても次のコマンドを実行する

複数のコマンドを一つのコマンドセットとして登録する場合、その中の一つがエラーになった場合でも、続けて次のコマンドを実行する場合に指定します。

B) コマンドギャラリーに登録

このオプションは、サービスの操作には関係ありません。これを指定すると、コマンドギャラリーに登録され、別のコマンドセットを登録するとき、コマンドギャラリーから、ここで登録したサービス操作を選択することが可能となります。

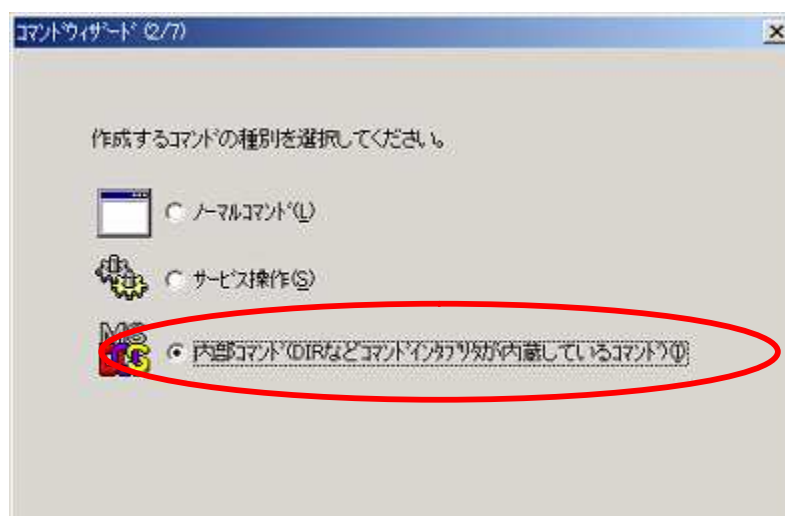
最後に、設定内容を確認して、＜登録＞ボタンを押します。

設定内容を変更したい場合は、＜戻る＞ボタンを押して、変更したい設定項目がある画面まで、戻ってください。

(4) 内部コマンドを登録する

「内部コマンド」とは、コマンドプロンプトで実行する”DIR”コマンドのように、コマンドインタプリタが内蔵しているコマンドです。内部コマンドは、個別にコマンドが存在しているわけではないので、ノーマルコマンドとして登録しても、実行できません。

コマンドの種別を選択するダイアログボックスで、「内部コマンド」を選択して、＜次へ＞ボタンを押します。



対象とするクライアントの、OSを選択します。

実行するコマンドラインと、コマンドの作業ディレクトリとを指定します。

コマンド名に空白を含む場合には、コマンド名をダブルクォーテーションで囲んでください。

(例: DIR "C:\Program Files\ESMPRO\ESMPROCM")

作業ディレクトリは省略可能です。ただし、省略した場合、コマンド実行時の作業ディレクトリは不定となります。作業ディレクトリが固定でなければならないコマンドは、必ず指定してください。

コマンドラインと作業ディレクトリとには、特殊文字を使用して、環境変数や、レジストリの値を含めることができます。特殊文字については、「12.3.5.コマンドラインに指定可能な特殊文字」を参照してください。

入力が終わりましたら、＜次へ＞ボタンを押します。

次に、終了コードの判定方法を指定します。

まず、コマンドの終了コードを判定するかどうかを選択してください。「終了コードによる成否判定を行わない」を選択しますと、このコマンドが終了したとき、その結果を判定しません。このコマンドは、必ず正常終了扱いとなります。

「終了コードによる成否判定を行う」を選択した場合は、その下の、正常終了したとみなす、終了コードを登録してください。コマンドが、ここで登録された値で終了しなかった場合に、そのコマンドは異常終了したとみなします。

コマンドの終了を待ち合わせる時間を「秒」単位で指定します。

実行したコマンドが、ここで指定した時間をすぎても終了しない場合には、そのコマンドを強制終了します。

入力が終わりましたら、＜次へ＞ボタンを押します。

オプションを指定します。

オプションには、以下のものがあります。

A) 標準出力を取得する

コンソールに結果を出力するコマンドの場合、このオプションを指定することで、その出力を取得することができます。

B) 標準エラー出力を取得する

標準エラー出力（通常はコンソール）にエラー情報を出力するコマンドの場合、このオプションを指定することで、そのエラー情報を取得することができます。

C) このコマンドが失敗しても次のコマンドを実行する

複数のコマンドを一つのコマンドセットとして登録する場合、その中の一つがエラーになった場合でも、続けて次のコマンドを実行する場合に指定します。

D) コマンドギャラリーに登録

このオプションは、コマンドの実行には関係ありません。これを指定すると、コマンドギャラリーに登録され、別のコマンドセットに登録するとき、コマンドギャラリーから、ここで登録したコマンドを選択することが可能となります。

最後に、設定内容を確認して、＜登録＞ボタンを押します。

設定内容を変更したい場合は、＜戻る＞ボタンを押して、変更したい設定項目がある画面まで、戻ってください。

12.3.5 コマンドラインに指定可能な特殊文字

コマンドラインおよび作業ディレクトリには、特殊文字を使用して、環境変数とレジストリ値を指定することができます。

コマンドラインまたは作業ディレクトリに、これらを指定しておく、クライアント上でコマンドを実行するときに、これらの文字列を、そのクライアントの環境変数やレジストリに設定された値に置き換えます。

(1) レジストリ値を指定するには

「\$」を特殊文字として使用します。

「\$」で囲まれた文字列を、コマンド実行時に置換するレジストリ値の名前とみなします。「\$」で囲まれた文字列には以下のように、レジストリキーおよびレジストリ値の名前を記述しなければなりません。

`$AAAAA¥BBBBB$`

AAAAA : レジストリキー (サブキーを含む) を記述します。

BBBBB : レジストリ値の名前を記述します。

コマンドラインに特殊文字としてではなく「\$」を使用する場合は、打ち消し文字「#」を使用します。

(例)

`$AAAAA¥BB#BB$` は、
レジストリキー「AAAAA」配下の値「BB\$BB」として、処理します。

特殊文字「\$」で囲まれた文字列は、そのレジストリ値の属性によって次のように置換されます。

属性	動作
REG_SZ,REG_MULTI_SZ,REG_EXPAND_SZ	値のデータをそのまま使用します。
REG_BINARY	値のデータを文字列と見なして、そのまま使用します。
REG_DWORD,REG_DWORD_BIG_ENDIAN	値のデータを10進数で表現した文字列として使用します。

使用例：

コマンドラインに、

```
$HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥NEC¥ESMPRO/CM¥PathName$¥Bin¥cmar.exe
```

と指定した場合、クライアント上での

レジストリ「HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥NEC¥ESMPRO/CM」キーの値「PathName」のデータが、「C:¥Program Files¥Esmpro¥Esmprocm」であったとすると、このコマンドラインは以下のように展開され、実行されます。

```
C:¥Program Files¥Esmpro¥Esmprocm¥Bin¥cmar.exe
```

(2) 環境変数を指定するには

「**%**」を特殊文字として使用します。

「%」で囲まれた文字列を、コマンド実行時に置換する環境変数の名前とみなします。「%」で囲まれた文字列には以下のように、環境変数の名前を記述しなければなりません。

```
%AAAAA %
```

AAAAA : 環境変数名を記述します。

コマンドラインに特殊文字としてではなく「%」を使用する場合は、打ち消し文字「#」を使用します。

(例)

%AA #%AA% は、
環境変数「AA%AA」として、処理します。

使用例：

コマンドラインに、

```
%windir%¥PutLog.exe
```

と指定した場合、クライアント上での環境変数「windir」の値が、「C:¥WINNT」であったとすると、このコマンドラインは以下のように展開され、実行されます。

```
C:¥WINNT¥PutLog.exe
```

12.3.6 登録したコマンドセットを他の端末にコピー

一つの端末で登録したコマンドセットを、ファイルをコピーすることにより他の端末にも登録することができます。

以下に示すレジストリ値に設定されているフォルダ配下に、「CS」というフォルダがありますので、このフォルダに格納されているファイルを他の端末にコピーしてください。

キー：HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥NEC¥ESMPRO/CM¥Component¥CMEXEC
値 : Files

12	コマンド実行ツール	12-1
12.1	コマンド実行ツールとは	12-1
12.2	コマンド実行ツールを使用する前に	12-1
12.3	コマンド実行ツールの操作.....	12-3
12.3.1	コマンドを実行するには.....	12-3
12.3.2	コマンドの実行結果を参照するには.....	12-9
12.3.3	実行中のコマンドを中止するには	12-11
12.3.4	コマンドウィザードで、コマンドを登録するには.....	12-11
12.3.5	コマンドラインに指定可能な特殊文字	12-18
12.3.6	登録したコマンドセットを他の端末にコピー	12-19